

第 42 回目 新しい人を身に着る (14)

はじめに

◆今回は、結婚の奥義について、結婚における夫婦の愛の連帯性について考えたいと思います。夫婦の愛、それなら私には関係ないと思われる方もおられるかもしれませんが、しかしそうではありません。結婚というものを制定された神の真意を知ることが、自分がキリストの花嫁として生きることがどういうことか、キリストのからだである教会に属して生きることがどういうことかを知ることと密接な関係にあるからです。

◆私たちの教会は、地域でキリスト教のブライダルの働きをさせていただいています。当教会がそのような働きを主からゆだねられていることを感謝しています。結婚式の前に必ずカウンセリングという時間を 10～15 分ほど持ちます。挙式する新郎新婦と司式者が顔を合わせて、挙式するお二人に挙式の心構えをさせるためです。私の場合、結婚についての大切な教えは、ほとんどその 10 分間のカウンセリングの対話の中で話してしまっているのです。どんなことを話しているのか、その舞台裏をご紹介しますと思います。



◆そこでは三つのポイントについて、会話形式でさりげなく話します。

**第一のポイント**は、「お二人は、なぜ、今日結婚式をされますか?」と質問いたします。きちんと答えられる方はまずおられません。「なぜ」という質問に答えを詰まらせます。つまりなぜ結婚式をするのか、なぜ結婚するのか、あまり考えていないからです。中にはすでにお腹に赤ちゃんがいて、「できちゃった婚」で結婚する人が多くなってきていますが、さすがに、「赤ちゃんができたので・・・結婚します」と言う人はいません。できても、できなくても、「なぜ結婚式をしますか」というこの唐突な質問の真意は、挙式される方に結婚が何かをしっかりと向き合わせるためです。人に祝福してもらうためとか、結婚衣装が前から着たかったとか、親を安心させたかったとか、はじめとか言われますが、大切なことは、お互いが神様から与えられた自分の生涯の最高のパートナーであることを認めて、隠されたところではなく、公の場において、お互いに誠実を尽くしていくことを約束する式であることを自覚してもらいます。だれの結婚式でもない、自分たちの生涯の約束の式だということを自覚してもらいます。

**第二のポイント**は、挙式されるお二人が、これまで自分の覆いとなってくれた両親のもとから離れて、新たな覆いの中に移行することをお話しします。そのための質問はまず新婦にこう尋ねます。「あなたは今日、お父様と入場されますか。あなたをご両親に愛されて育ってききましたか。」です。中には複雑な表情を見せる方がおられますが、自分が両親という覆いの下にあったけれども、今日は、その覆いから正式に離れて、神があなたの覆いとして備えて下さった新郎の下に移行するというのが、入場式です。そこで覆いの代表として新婦の父と新郎がしっかりと挨拶をして引き継ぐのです。覆いというのは、権威と責任を意味します。ですから、新郎にはその自覚をもって新婦の生涯の覆いとなるという自覚を持ってもらいます。同様に、新郎にも「あなたをご両親に愛され

## אגרת שאול אל האפסים

て来られましたか。」と尋ねます。そして、あなたが結婚しますと、あなたの覆いのご両親ではなく、神様があなたの覆いとなります。ですから、あなたは自分だけでなく、自分の覆いのもとに来る新婦ややがて与えられる子どものためにも、神の祝福を受けることができるように、新郎であるあなたがまず神様に心を開くように促します。

**第三のポイント**は、人間関係における優先順位のことを扱います。こんな質問をします。「私たちはさまざまな人間関係の中で生きています。一つは親子関係、二つ目は友人知人、あるいは職場の仲間との関係、そして三つ目は夫婦関係です。あなたがたが良い家庭を作っていくときに、どの関係を優先されますか。どの関係も大切ですが、優先順位です。」一中には、優先順位をつけられないという方もおられますが、ほとんどが夫婦の関係だと言います。「もし親子関係が優先されるならば、お二人は決して幸せになれません。」と、はっきりと釘を指します。日本における永遠のテーマである嫁と姑の関係において、新郎はリーダーシップをとらなければならないことをお話しして、お二人の結婚式が祝福されるようお祈りしてカウンセリングを終わります。

●これ以上、結婚について何を話すべきでしょうか。ほとんどありません。実際の挙式の中では、新郎新婦と参列された方々が、イエス・キリストを通して現された神の愛についての話を聞き、新郎新婦の約束を確認するだけなのです。結婚式の最も大切な部分は、実はカウンセリングの10～15分間の時なのです。

### 1. 一体となるべき使命としての結婚

◆さて前置きが長くなりましたが、今回の結婚の奥義を示す聖書のことばを見てみましょう。テキストは5章31～32節です。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙5章31～32節

31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」

32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

●括弧(「・・・」)の部分は、旧約聖書の創世記2章24節にあることばを引用しています。そこには結婚が目指す目的が何であるかが明記されています。と同時に、結婚はキリストと教会のかかわりを指し示す奥義でもあるということを使徒パウロは述べようとしているのです。つまり、主にある夫と妻の関係は、キリスト(花婿)と教会(花嫁)の関係の反映(模型)となるよう、神によって、計画されたものであるということです。とすれば、キリストを信じる者同士の結婚の使命は、実に大きいと言わなければなりませんし、結婚した後でも、このことを自覚することはきわめて重要なことではないかと思えます。

●「結婚がキリストと教会のうるわしい輝かしい愛のかかわりを指し示すべく、使命を帯びたものである」ということを自覚して結婚するカップルがどれほどいるでしょうか。キリストを信じているクリスチャン同士の結婚ですら稀です。だとしたらなおさらのこと、未信者の結婚の場合、この奥義は隠されたままです。

●私ども夫婦も、キリストを信じる者同士として結婚をしましたが、そのようなことについては全く自覚なしで

した。だいたいにおいて、その頃、「キリストと教会の関係」なんてほとんど考えたこともありませんでしたし、結婚前に教会で教えられてもいませんでしたし、牧師のカウンセリングもありませんでした。しかし、考えたことがなくても、教えられたことがなくても、結婚するクリスチャンたちに神が期待しておられることは、神のご計画においてきわめて重要な事柄なのです。このことを次世代のクリスチャンたちに教えていく責任があるのではないかと思います。

## 2. 今日における結婚の危機—熟年離婚の増加の現実—

### (1) 「熟年離婚」というキーワード

●「熟年離婚」というドラマがテレビで放映されたそうです(2005年)、私は見てはおりませんが、話の内容はこうです。家族のために仕事一筋で頑張ってきた夫、その陰で静かに家族を見守ってきた妻。しかし知らず知らずのうちに構築された溝は、取り返しのつかないほど深くなって行って、ついに妻の方から離婚を言い渡すという「思わぬ事態」からはじまるドラマです。どうしてそんな事態になったのか、夫は全くその事情が呑み込めない。しかし、次第に自分がどれほど妻を理解していなかったか、家族と向き合っていかなかったか、その代償であったことに気づいていくという内容のドラマです。

●このドラマが作られた背景には、これからの日本において、こうした「熟年離婚」がますます増加していくという警鐘でもあるようです。10代、20代の若年期でも離婚率が高くなっています。結婚したものの現実の厳しさに耐えることができないということでしょう。しかし、ここ数年の間で、長年連れ添った夫婦が離婚するケースが増えているという現実があります。20年以上も連れ添った夫婦がする離婚件数が年々増加しています。なぜ、熟年離婚をする夫婦が増えているのか？

### (2) 熟年離婚の特徴

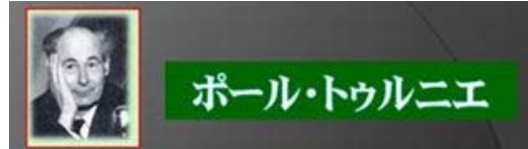
①「熟年離婚」の特徴として、ほとんどが妻の方から話が持ち上がるという特徴があります。つまり、夫には何ら不満はないが、妻には長年の夫婦生活に不満があった・・・という捉え方ができます。この点は、あとからまた取り上げたいと思います。

②熟年離婚に見られる特徴にはもうひとつあります。それは、日本がちょうど高度経済成長期にあった中で結婚した男女、つまり「団塊の世代」と呼ばれる時代の人たちだということです。団塊の世代と呼ばれる男性とその妻の間には、「夫は外で働き、妻は家で主婦をこなす」という役割分担がはっきりとしていた面が強く働いていたと共に、かつて日本文化に根付いていた家長という考え方が、夫に絶対的な権力を与えていたため、「妻は夫に従うものである！」という風潮がありました。つまり、妻である女性は、我慢を強いられていたと言い換えることも出来るわけです。今では、女性の社会進出も特に珍しくなく、女性も頑張ればひとりで働きながら自立できるという社会環境が整いつつあります。子どもの養育も終わり、夫が定年を迎えるのを機に、再び自立を目指して生きたいと願う女性が増えているのです。

●いずれにしても、愛し合って結婚し、長年連れ添った夫婦が離婚という破局を迎えるということ、そしてそれは現実に増加していく傾向にあることを知ることは寂しい限りです。こうした現実があればあるほど、キリストを信じる者同士の結婚の使命は、実に大きいと言わなければなりません。すでに結婚している者は、この信仰的

自覚が、今日、求められているのではないのでしょうか。これは結婚している者だけでなく、奥義として、つまり真の愛の連帯としての教会を建て上げることの信仰的自覚が今日求められているのです。そうした使命を担うクリスチャン・ホームが起こされるように、私たちは祈っていかなければなりません。また、一方が未信者の場合も、夫と妻が双方とも神の喜ばれる愛の連帯をもつことができるように祈らなければなりません。一方が未信者であっても、そのいずれかが神に属していることで、相手もまたきよいものとされているのです。その夫婦から生まれる子ども神にあってはきよめられた存在、特別な存在なのですから、なおのこと、結婚の奥義を現わす者たちとなるように祈らなければなりません。

### 3. 結婚の障害を乗り越える知恵



●その前に、結婚の障害となっているものは何かを考えてみたいと思います。熟年離婚の場合は、その多くが妻の不満から突き付けられているということをお話ししました。

フランスの精神科医でポール・トゥルニエという方がおられました。1898年5月12日 ジュネーヴに生まれる。生後3ヵ月で亡くした父は牧師であった。孤児として、深い孤独と悲しみと不安を抱えた少年時代を過ごし、彼を支えた教師との「対話」をきっかけに、神との「親しく一つになる交わり」へと導かれ、真に成熟した人間に成長していく。やがて、キリスト教信仰と医学の結びつきを明らかにした「人格医学」を提唱し、国際人格医学界を創設、医者と患者の人格的なふれあいを重視した臨床を行った。1986年10月7日 ジュネーヴで死去。著書は以下の通り。「人生の四季—発展と成熟—」「生きる意味」「老いの意味—うるわしい老年のために—」「結婚の障害—愛による連帯を求めて—」「女性であること—パーソナルな世界を求めて—」「人間・仮面と真実」「暴力と人間—強さを求める人間の心理—」「強い人と弱い人」「罪意識の構造—その実像と虚像の分析—」「秘密」「なまえといのち—人格の誕生—」「生の冒険」

●ポール・トゥルニエの著作の中の「人生の四季」の一節

「いつの日か私たちは、失敗のほうが、もしかしたら成功よりも実り豊かなものであるかもしれないということを理解するようになるでしょう。なぜなら、失敗は私たちに価値の再検討を迫るものだからです。」・・・この文章だけでも、彼の人間理解の深さを読み取ることができます。

●彼の著書の中で、今回は「結婚の障害—愛による連帯を求めて—」という本から私が学んだことをご紹介しますと思います。この本では、結婚生活の破局が、夫と妻が、お互いに、どんなに相手を知ろうとしないか、理解していないかということ明らかにしながら、夫婦がお互いに相手を理解するためには、何を考え、何を問題にしなければならぬかを教えています。実は、熟年離婚を回避するための秘訣がこの本の中にすでに記されているのです。

#### (1) 夫婦関係の三つの段階

●精神科医であったポール・トゥルニエは、夫婦関係のあり方には三つの段階があると言います。

##### ① 蜜月の段階(ハネムーン)

●夫婦はお互いに理解し合っているという感じをもっている。本能的に、私たちは自分にはないものを補ってくれる配偶者を選びます。そのために一致していると感じるのです。この時点では、お互いの違いが、まだ本当には見えていない時期なのです。

## ② 相手との違いに気づく段階

●ところが、5 ないし 10 年もすると、結婚の第二段階がきます。この段階では、お互いにそれぞれ自分が考えていたような人ではないこと、自分とは違う存在だということに気づきます。しかも今まで気づかなかった相手の良いところではなく、欠点を多く発見します。そしてその欠点はとてものがまんできかないものであることが多いのです。相手のしぐさ、態度、嗜好、考え方、など。

●そこで、まず静かに、相手を戒め、それから叱り、哀願し、そして最後には脅すようになります。しかしこういったことはどれも効果がないことを思い知らされます。そこで、「わたしは、到底、相手を理解できない」と考え、衝突の危険を回避するために、自分の殻に閉じこもってしまうのです。そこから秘密をもつようになります。

## ③ 破局への道か、それとも理解する道かを選択する段階

●こうした事態に陥った場合、一つの方向は、ますます自己の殻に閉じこもっていく方向です。しかしそれは幸福を求める戦いをあきらめる道です。自己の殻に閉じこもるだけでなく、相手を恨み、苦々しさや反抗を表し始めます。「わたしの夫は私が信じてきた人ではない」「私の妻は私が思っていたのとは全然違う」「私はひどい思い違いをしてきたのだ」という気持ちをいさぐようになり、このときはじめて離婚を考え始めるのです。

●二つ目の方向は、現実を勇気をもって受け入れていく方向です。つまり、相手があるがままに受け入れていく道です。これは問題を避けることではなく、むしろ問題に直面する方向です。それは自分の配偶者の本当の姿を理解するための試みです。相手の欠点があっても、解決していない問題があっても、相手を愛し、これまで相手の見落としていた部分を理解しようと決意することです。どんな夫婦にも問題は必ずあります。お互いが神にあって、自分の愛の足りなさを受け止め、理解していこうと努めるならば、一体への道が開かれます。

●自分の配偶者が自分とは全く異なった存在であるという事実直面し、それを受け入れることには勇気がいります。しかし自分とは異なる存在だと理解できるようになるならば、もうすでに大きな前進をしたのです。これができないために破局を迎える夫婦も少なくないからです。

●人は生来、それぞれ非常に異なっているにもかかわらず、お互いに補い合ってはじめて完全なものとなさせられるのです。お互いを通して、前には知らなかったり、感じなかったりした多くのことを発見するかもしれないと考えること。これが結婚の目的である一体となる道なのです。

## (2) 一心一体への知恵

### ① 理解しようとする心(意志) – 互いに理解するためには、理解したいと望まなければならない –

●お互いに理解するための第一の条件は、相手を理解したいと望み、それを求め、そして進んでそれを実行していくことである、ということに気づくことである。夫婦の間にもっともよく見られる欠点は、十分な率直さが欠けていることです。「夫婦はもはや二人ではなく一体である」ということは、夫婦が明らかに相手に対して秘密をもたないということの意味します。夫婦がお互いに物事を隠し始めるということは、一体性を脅かすことであり、やがて失敗(破滅)への道をたどり始めるのです。

### ② 表現しようとする心(意志)

●互いに理解するためには、自分の思っていることを表現することが必要です。人はだれでも自分の思っていることを表現する必要があります。どうしても自分を表現する機会を与えられなければ、その人は病気になるかもしれません。自分を表現できる機会は多くいろいろな関係においてあります。しかし、夫婦はその要求を満たしうる最高の関係です。にもかかわらず、どちらかが耳を傾けようとしなければ、深いかわりは育ちません。自分を表現するためには、多くの時間を必要とするのです。

### ③ 勇気を持つこと

●互いに理解するためには、勇気が必要です。互いに心のうちをすっかり開くことは、本当の理解のためには絶対に必要なことです。しかしそれには多くの勇気が必要とします。というのは、私たちの多くが恐れをもっているからです。その恐れとは、まず一つは、さばかれることの恐れです。つまり批判されるという恐れです。特に、自分と最も近い人から受ける批判を恐れるものです。会話がより真実なものになることによって、自分の一番感じやすい傷口を開くのを恐れるのです。恐れを隠す手段として、怒りを外に表したり、頑固に沈黙を続けたりして自分の恐れを隠そうとします。

●第二の恐れは、忠告を受けることの恐れです。すばらしい妻の忠告を受けたことにより、自分は無能だという印象を持ってしまいやすいからです。妻の最も重要な務めは、夫が生活の中で、あるいは職場でうけるすべての打撃に対して夫を慰めることなのです。しかも、慰めるためには、それほど話をする必要はないのです。耳を傾け、理解し、愛することで十分です。泣いている子どもの母親が、自分のひざに逃げてくる子どもを抱いているのをごらんください。母親は何も言葉を発しません。しかし、やがて子どもはふたたび涙をふいて母親の膝から離れていくのです。

●妻にしても、夫にしても、打ち明ける悩みに対して、あまりにも急いで忠告することは、かえって傷つくこともあるのです。本当に人を理解するためには、答えるのではなく、その人の言葉に耳を傾ける必要があるのです。長く、そして注意深く傾聴する必要があります。だれかの人の心を開けてあげるためには、その人に時間を与えなければなりません。そして、相手がもっと上手に説明できるように、出来るだけ注意深く、ほんのわずかで質問するのです。そして何よりも、相手がしなくてはならないことを、その人よりももっとよく知っているのだという印象を与えないことです。そうすることによって、私たちは無理やりに相手を自分の中に閉じこもらせてしまいます。批判しすぎることもまた同じ結果をもたらします。それほどに、人の心は弱いものなのです。

【新改訂改訂第3版】エペソ人への手紙 5章 33節

それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。

---

### 「付記」として

●お互いにすべてを理解するためには、イエス・キリストに生活を従わせなければならないのです。結婚の奥義の中に、神と人とが住む神の家、神の王国、神の都が建てられるという神のご計画が啓示されているからです。「建てる」はヘブル語では「バーナー」(בָּנָה)です。その初出箇所は創世記 2 章 22 節、「神が人から取ったあばら骨によってひとりの女に造り上げ(בָּנָה)」というところに使われています。これは神が人という存在を建て上げるためにしたことでした。つまり、男と女がその深い交わりを通して、神と人とのかわりのいのちを繁栄

## אגרת שאול אל האפסים

させるためです。人はここで初めて「ふさわしい助け手」が与えられたのです。神は、神と人、人と人とのかわりを建て上げることのできるお方です。

●聖書には二つの「建て上げ」の系譜があります。一つは、カインが自分の犯した罪のゆえに主の前から去って、エデンの東ノデに住みつき、町を建てます(創 4:17)。そして、自分で自分を建て上げようとする文明が始まっていきます。そして、「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名を上げよう。」(同、11:4)と呼びかけます。しかし、それに対して神は彼らのことばを混乱させてそれを阻止します。人間の力で建て上げていこうとする傾向は、神の民となるべく選ばれた者たちに対してもその誘惑が絶えずありました。たとえば、なかなか子どもが与えられなかったアブラハムの妻サラは自分の女奴隷ハガルによって、「私は子どもの母になれる(בְּנֵי)<sup>ハ</sup>」と考え、ハガルのところに入るように夫に勧めました(創 16:2)。同じことをヤコブの最愛の妻ラケルもします(創 30:3~8)。

●もうひとつの系譜は、神によってすべてを建て上げていこうとする流れです。神がノアの時代、すべてをリセットすべく洪水を起こした後に、ノアは祭壇を築きます。この祭壇を「築く」という動詞にバーナー(בָּנָה)<sup>ハ</sup>が使われています。祭壇を「築く」ことは、神を神として、神によって再建されるために自分のすべてを差し出すという礼拝行為です。この流れはアブラハム(12:7, 8)、イサク(26:25)、ヤコブ(35:7)と引き継がれ、モーセへと引き継がれていきます。しかし神の民の歴史は祭壇を築くことをやめたことにより、自分たちのよりどころであったシオンの町(エルサレム)を失いました。今や、神の民はバビロンにおいて悲痛なほどの試練の中から、再度、神がシオンを再建されることを確信するようになったのです。

●神の家、主の家の再建は神の独占行為です。神の民の将来を保証するのはただ神のみであるという信仰の光が灯されたのでした。それゆえ、この信仰は「後の時代のため」(後世の世代のため)に「書きしるされ」なければならなかったのです(詩篇 102:18)。「まことに神が・・・エルサレムの町々を建てられる。」(詩篇 69:35)、  
「主はエルサレムを建て、イスラエルの追い散らされた者を集める」(詩篇 147:2)、「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。」(詩篇 127:1)、これらはみな同じ思想をもった詩篇と言えます。主が家を建てられること、それが「結婚」に隠されている奥義です。